

ゾロアスター教，マニ教の表象論

—二元論の表象—

膽畑 隆明

1. はじめに

マニ教の研究は、18世紀に始まったとも言えるが、考古資料が増え、活発になったのは20世紀以降に限定されることになるだろう。しかしながらこうした「学術的」研究以前にも、「マニ教」という言葉は多くの場面で用いられてきた。このことを裏付けるかのように、現代英語の”Manichaeism”には”dualism（二元論）”の意味が内包され、直訳した場合の「マニ教的」という言葉も含めて、濫用される傾向は根強いようだ⁽¹⁾。また、アウグスティヌスによるマニ教の「克服」も西洋キリスト教的な文脈で語り継がれ、マニ教をキリスト教外部の「敵」として認識する際の一助となり続けているようである。

こうした背景もあってか、現代のマニ教の研究は考古資料に基づき、従来の様式を復元することに何よりも比重が置かれている。他方、こうした資料は以前よりは豊富になったものの、内容が限定的であることは否めず、あるいは逆に、一つの資料によって簡単にそれまでの積み重ねが覆るような状況にあるとも言える⁽²⁾。また、原点の信仰を再現するという研究傾向自体、過去に対する過度の反省とも考えられなくはない。

マニ教についての研究に新たな光を当てるためには、表象としてのマニ教、すなわち、マニ教が如何に描かれてきたか、という点を包括的に見た研究が必要であろう。筆者の問題関心は、マニ教表象の変遷にあるが、これまでのところ、そのような研究はゾロアスター教の表象研究の中に包含されている場合が多いため、以下のサーヴェイではゾロアスター教の表象研究が中心になる。両者については、発生段階としては関係がないというのが近年定説となっているようだが、両者は歴史的には密に関係しており、何よりも西洋社会における表象を考える上では分けて考えることはできない。

2. ゾロアスター教の表象

2-1 本邦における研究

マニ教に比べると、ゾロアスター教の（特にゾロアスターについて）表象研究はより進んでいるように思われる。大きな要因の一つとしては、弾圧等で消え去ってしまったマニ教と違い、ゾ

ゾロアスター教徒たちは少数ながら生き延び続けていたことが挙げられるだろう。結果的に多くが損失したとはいえ、一次資料を手に入れることができるようになったのは、マニ教よりもずっと早い。

また、西洋社会におけるゾロアスター教へのある種の憧憬も関わっているかもしれない。キリスト教においても、聖書に登場する東方の三博士は、ゾロアスター教徒と考えられ、イエス以前の聖者として尊敬されてはいた。他方マニ教は、アウグスティヌスが『マニ教反駁』によってキリスト教神学の一端を切り拓いたゆえか、トラウマ的な存在として忌み嫌われてきた。両者の違いは、あるいは自身の宗教伝統の外か内か、という違いとも考えられる。マニ教はキリスト教の異端であったが故に近親憎悪を招いたが、ゾロアスター教はあくまでも「ペルシア人」の宗教伝統であったゆえか、それほど憎まれなかったのかもしれない。

前田耕作の『宗祖ゾロアスター』(1997)においては、ゾロアスターの生涯から、その後のゾロアスター教の展開について述べるばかりでなく、西洋におけるゾロアスターのイメージの変化を子細に追っている。ゾロアスターが「アジアの古い叡智」とされていたギリシア時代から始まり、ローマ、キリスト教においては「東方の三博士」の祖として考えられ、そしてルネサンス期における古代への憧れがもたらしたオリエントへの眼差しによって、ゾロアスター教が中心的思想（一神教的思想）を超えるイデーの一端にまでなった16世紀から17世紀には、デッサ・ヴァレやシャルダンといった人物が生きたゾロアスター教の資料をもたらし、18世紀には『歴史批評辞典』の著者ピエール・ベールの旺盛な批判精神により、ゾロアスター教や異端とされたマニ教の復権が図られた。18世紀にはそれまでの語りに対して批判的に、ゾロアスターの歴史の実像が求められ、やがてアンクティル＝デュペロンによって、『ゼンド・アヴェスター』が刊行される。ここまでが、表象論に関して通史的に扱われている範囲であり、これに加えてニーチェの『ツァラトゥストラ』、あるいはそれに先立って、18世紀末の『魔笛』についても簡易に触れられている。筆者の前田耕作は特に『魔笛』について、「フリーメイソンのというよりも、ゾロアスター教を根源に据えたミスラの秘儀」こそが中心思想であったとしている⁽⁴⁾。

青木健『ゾロアスター教』(2008)はこうした一連の流れを「ルネッサンス的ゾロアスター」と「ニーチェのツァラトゥシュトラ」に分け、さらに神智学やナチス・ドイツのアーリア至上主義におけるゾロアスター像を加えている⁽⁵⁾。神智学を含むオカルト的な文脈はルネッサンス的ゾロアスターの系譜だが、ナチス・ドイツにおける「アーリア民族の英雄」像は、古代イラン学の成果を踏まえたものであり、少なくともゾロアスターを「古代アーリア民族の神官」と認識している時点で、「ルネッサンス的」、「ニーチェ的」の双方とは一線を画していた。当然、完全に科学的な探求であったわけでもなく、「総統（ヒトラー）との共通性も持つ偉大なアーリア人」として描かれている⁽⁶⁾。

青木はまた、イスラーム側の資料を通じ、そこに描かれたゾロアスター教像を論じている。後述の Shaked に関しては触れていないものの、Choksy の研究（これ自体は社会学的なものだが）を近い研究として挙げている⁽⁷⁾。

2-2 海外における研究

海外においては、本邦における以上にゾロアスター教の表象研究は進んでいる。

Stausberg(2008)はこの研究動向に二つの潮流があることを述べている。一つは近世におけるものに焦点を合わせたもの、もう一つはギリシアに始まり、1880年に書かれたニーチェのツァラトストラまでを通史的に論じたものである⁽⁸⁾。

Jong は 1997 年の時点で、ギリシア語・ラテン語文献を通じて見られるゾロアスター教の表象について網羅的に触れている⁽⁹⁾。

Rose による *The Image of Zoroaster*(2000)はルネッサンスからニーチェに至るまでの「ヨーロッパにおけるゾロアスターの受容」をもっとも網羅的に取り扱っている。Rose はルネッサンスからニーチェまでの間にフランスの啓蒙主義、ドイツやイギリスにおけるロマン主義の影響についてそれぞれ章を割り、通史的に論じている⁽¹⁰⁾。

この他にも、Shaked(1994)はイスラーム資料にみられるゾロアスター教の表象について触れている。彼はゾロアスター教の内部資料とされるものが後世にパフラヴィー（中世ペルシア語）で書かれたものであり、同時代的（特にササン朝後期からイスラーム初期にかけて）資料としてはむしろアラビア語資料の優位性を説いている⁽¹¹⁾。

3. マニ教の表象

ゾロアスター教に比べれば、マニ教の表象論的研究はそれほど進んでいない。為されている場合でも、ゾロアスター教に付随するような形でしか扱われていない。

マニ教の宗教学的な研究として高く評価されているのが、BeDuhn の *The Manichaean Body*(2000)である。これはマニ教研究の状況について可能な限り網羅したうえで、マニ教徒自体が如何に世界を理解していたのかを明らかにしようと試みている⁽¹²⁾。歴史的な紹介は最小限に抑えられているが、すでに背景智識をある程度有している読者が想定されているため、やむを得ない点である。筆者の BeDuhn は emic-etic という対立を頻繁に用いる。彼の研究は当事者の視点（あるいは emic な）を重視しているゆえか、逆に etic な部分を排除してしまっている。この意味で、外部者による「マニ教像」の追求という点は、マニ教の研究としてはあまり盛んではないことが分かる。

近年この表象という点に触れた著作としては、Brian の *Manichaeism : an ancient faith rediscovered*(2011)が挙げられるが、末尾で紹介している程度である⁽¹³⁾。

4. おわりに

マニ教とゾロアスター教における表象研究は、ゾロアスター教についての方が盛んである。特に通史的な研究、近代のゾロアスター教表象研究は、成熟してきたように思われる。

この上でさらにこの研究を進める上では、おそらくは近現代以降、ニーチェやナチス・ドイツのゾロアスター像の、さらに後に登場してきたものを探す必要があるだろう。可能性のある手段の一つとしては、近現代の小説、ポップカルチャーについての考察が挙げられる。そこに登場するゾロアスター教、マニ教という言葉についての分析が必要となるだろう。特に魔術の起源としてのゾロアスター（青木の述べるところの「ルネサンス的ゾロアスター」やその延長ともいえる「神智学的ゾロアスター」）を考えれば、現代のポップカルチャーにおいて見出すことのできる

可能性は十分にあるだろう⁽¹⁴⁾。

小説作品では歴史的な意味でのマニやマニ教を対象にしたものがいくつか書かれており⁽¹⁵⁾、従来のイメージとの相違、相同を知る上で参考となるかもしれない。

註

- (1) 近年の例で言えば、GAVAN Gray 「マニ教の世界観：日本の外交政策と国際関係を二元論的に解することの危険」(『Journal of Osaka Jogakuin University』11号, 2015年), 81-102頁。ここでのマニ教という語の用法は、二元論の説明以上の意図はないものである。
- (2) 青木健『マニ教』講談社, 2010年, 59頁。
- (3) 前田耕作『宗祖ゾロアスター』筑摩書房, 1997年, 34頁。
- (4) 同上, 108頁。
- (5) 青木健『ゾロアスター教』, 講談社, 2008年, 188-193頁。
- (6) 同上, 194-199頁。
- (7) 青木健「イスラーム文献が伝える多様なゾロアスター教像：六・八世紀のアラビア語資料のゾロアスター教研究への応用」(『宗教研究』81号, 2007年), 653-674頁。
- (8) Michael Stausberg, “On the State and Prospects of the Study of Zoroastrianism”, in *Numen*, vol.55, 2008, pp.561-600.
- (9) 青木健, 前掲論文, 653-674頁。
- (10) Jenny Rose, *The Image of Zoroaster: The Persian Mage Through European Eyes* (New York: Bibliotheca Persica Press, 2000).
- (11) Shaul Shaked, “Some Islamic Reports Concerning Zoroastrianism”, in *Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, vol.17, 1994, pp.43-84.
- (12) Jason David BeDuhn, *The Manichaean body : in discipline and ritual* (Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 2000).
- (13) Nicholas Baker-Brian, *Manichaeism : an ancient faith rediscovered* (London: T&T Clark, 2011), pp.154-156. 邦訳 青木健訳『マニ教：再発見された古代の信仰』青土社, 2014年, 298-300頁。
- (14) 堀江宗正「サブカルチャーの魔術師——宗教学的知識の消費と共有——」(江川純一, 久保田浩編『「呪術」の呪縛』リトン, 2015年), 427頁。
- (15) 一例としては, MAALOUF Amin, 戸田聡『光の庭：小説マニの生涯』連合出版, 2011年。あるいは, 中野美代子『塔里木秘教考』飛鳥新社, 2012年。これらは歴史的資料に基づいていると思われる。それほど厳密な歴史的事実に基づいていないものであれば, 香港の小説家金庸による一連の武侠小説がマニ教をモチーフにしている。

参考文献

Hinnells, John R. and Alan Williams (eds.). *Parsis in India and their Diasporas*.
(London/New York: Routledge, 2007).